

## Step Mother / Father

5年生だった三女が教えてくれた、「自分の両親のどちらかが Biological Parent(生みの親)だという人が、クラスの半分もいなかった。」という話をしましょう。この話もまたクラスの中での出来事で、三女曰く、「理科の時間で遺伝を習っていた」そうです。子どもは理科の学習というより、クラスの中に、「本当の親ではない人に育てられている友達がいる」という事に、関心を持ってしまいました。両親の問題は子どもにとっても関係のない話ではないと気づき、自分の親は大丈夫なのだろうか、と心配になったのです。「私はお父さんもお母さんも好きよ。」「お母さん達、離婚しないよね。」と、疑わしそうな顔で聞かれた事で明らかです。なにしろ、物事を敏感に感じ始める年頃の子どもの言葉です。

Step Mother/Father(義理の母・父)といった言葉は、子ども達が友達を話題にする会話の中で、よく聞きます。それが、クラスの中の半数になる確率から、他人事とは思えなくなったのでしょうか。私たち夫婦の普段の様子から、なぜ「離婚」などと想像したのでしょうか。どうもその原因は、私の話し方にあったようです。

「お母さんはよくお父さんに文句を言ってるけど、あれじゃ、いつまでたってもお父さんは聞いてくれないよ。」「お母さんの問題を解決したかったら、お父さんに分かってもらえるよう、話してあげないと。」いい人間関係を作るためには、感情的(感傷的?)にならず、「どう会話するか」だと三女は力説しました。「大丈夫、大丈夫。やれば出来るから。簡単でしょ。よろしくね!」とまで言われてしまいました。私にとって残念な事に(?)、夫の話し方は、子ども達にはとても好ましい部類に入るのだそうです。上の2人の子ども達も、三女と同じような目で私を見ていました。どうも、私だけが夫や子ども達に、「論理的」に話をし、立派に「筋の通った」文句を言っていたつもりになっていたようです。

子ども達が感じているように、もし私が家族に受け入れられない「まずい話し方」をしているとしたら。そこでふと気がつきました。子ども達が私に望む「話し方」って・・・?

ちょっと話を振ってみると、たちまち3人娘から機関銃のごとく、私の話し方の「いいところ、悪いところ」を指摘され、「アメリカ式好ましい話し方」をコーチされました。子ども達曰く、まず、「自分が訴えたい事は何か」、次に、「それを相手にどうしてほしいのか、意思表示する。」「楽しい、嬉しい、悲しい、お願いしたい」といった「自分の感情を交えながら話すと、より説得力が増す」など。短時間で受けたノウ・ハウですから、記憶違いや思い違いで解釈しているところがあるかもしれません。ですが、常日ごろ、うちの娘達は「どんな話題になっても、どうして柔軟に対応できるのかしら」という疑問に対する、一つの解答を得たように思いました。家

庭で教えた覚えがないのですから、やはり、「学校でそうするように習っている。」という答えが返ってきました。

この2つの話は、15年ほど前、現在住んでいる家へ引越す前の地区での事です。夫婦共働きでやっと家のローンを払っているという、日本の平均的な家庭と同じような住宅街でした。そして、子ども達が通った学校のある先生に、親子2代で教わったという事や、近所の人はみんな知り合いというように、古き良き時代のアメリカが残っている地区でもありました。その上、安心して子ども達を外で遊ばせることが出来ましたし、遊び場はその辺の道路で充分といった環境でした。

そろそろ結婚適齢期になりつつある子ども達は、自分たちが過ごした小・中学生時代を思い出しながら、「いい経験をしたよね。」「自分の子どもを育てるなら、小さいうちは、私が育ったのと同じような環境で育てたい」という、未来像を教えてください。数年前の調査で、アメリカで最も安全とされ、教育レベルも高いと言われる地区に住んでいながら、どうしてそう思うのでしょうか。

それは、「自分の子どもにもたくましく育ててほしい。」と考えているからです。彼女たちが持っていると言える「たくましさ」は小さい頃に培われ、「世の中にはいろいろな環境があり、自分が知っている世界だけが全てではないと理解できる事」が、「自分の強み」になっていると。また、その「たくましさ」とは、「どんな環境にあっても適応できる力」である、と信じているのです。

\*

学校教育と言えば学業と考えがちです。アメリカの学校教育では、クラスの中で取り上げられる話題によっては、子ども達が受ける影響は千差万別です。日本の教育しか受けた事のない私とは全く違ったタイプに育った子ども達を、なかなか「興味深い」という目で見ています。

### 松本 康子 (まつもと やすこ)

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。

皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか?



子どもの現地校での学習や生活を通して、保護者が学ぶことは非常にたくさんあります。康子さんの実体験のエッセイです。

アメリカで生活しておられるお母様は、子どもの学校生活を通してアメリカの社会の現実を知り、学ばれる機会が多いと思います。康子さんのように、子どもから直接学ぶこともあるでしょう。その子どもと母親の学び合いにより、アメリカでも日本でもない、その家庭独自の親子関係が築かれていきます。それが子育ての基本でしょうか?

またまた、「母と子は共に育った」康子さんのレポートでした。感謝!